

国際価値論研究会 第8回例会 2016.4.17

横川報告へのコメント

# 歴史的ダイナミズムをどう分析するか

塩沢由典

# 目次

---

1. 理論とはなにか
2. 資本主義分析と資本家視点
3. 歴史的変化の経済分析(原理論はどう関係するのか)
4. 技術選択の意味
5. ダイナミック産業論について
6. 雁行形態・工程分割・世界最適調達
7. 結論

# 理論的分析とはなにか\*

- 理論と実験・実証・歴史分析とはどこがちがうか。
- 理論(teoria, θεωρία)
  - contemplation; speculation; a looking at
  - アリストテレスの用語。実践(プラクシス)や制作(ポイエーシス)と区別される。
- 定理(proposition to be proved)
  - 前提体系が分かっているのに、帰結が導けない。

# 理論と資本主義分析

---

## ●宇野経

- 原理論(純粹化傾向)、段階論、現状分析
- 横川・野口 中間理論←中範囲の理論(Merton)

## ●原理論の発展(進化)

- 原理論は一回かぎりの成立、その後の発展はないと考えられている。
- マルクス経済学を弱いものにした最大の要因?
- しかし、理論(諸原理の体系)は、進化・発展する。

# 古典派価値論/概成領域・未完領域\*

---

## ●5つの理論領域

- ◎国内価値論
- 地代論・枯渇資源論
- ◎国際価値論
- ×労働市場論
- ×金融経済論

## ●今後の努力方向

- 概成領域を発展
- 未完領域の理論化

# 資本主義経済を分析するには

## ● 資本家視点を貫徹せよ。

### ■ 転化問題(転形問題)[生産価格]

◆ 資本家は賃金でなく利潤の最大化を狙っている。

### ■ 利潤率の傾向的低下[低下しない]

◆ 置塩信夫 資本家の観点からは、資本利潤率の高い技術を選択する。

### ■ 植村高久『制度と資本』(塩沢書評、1999)

◆ 当事者視点⇒資本家視点

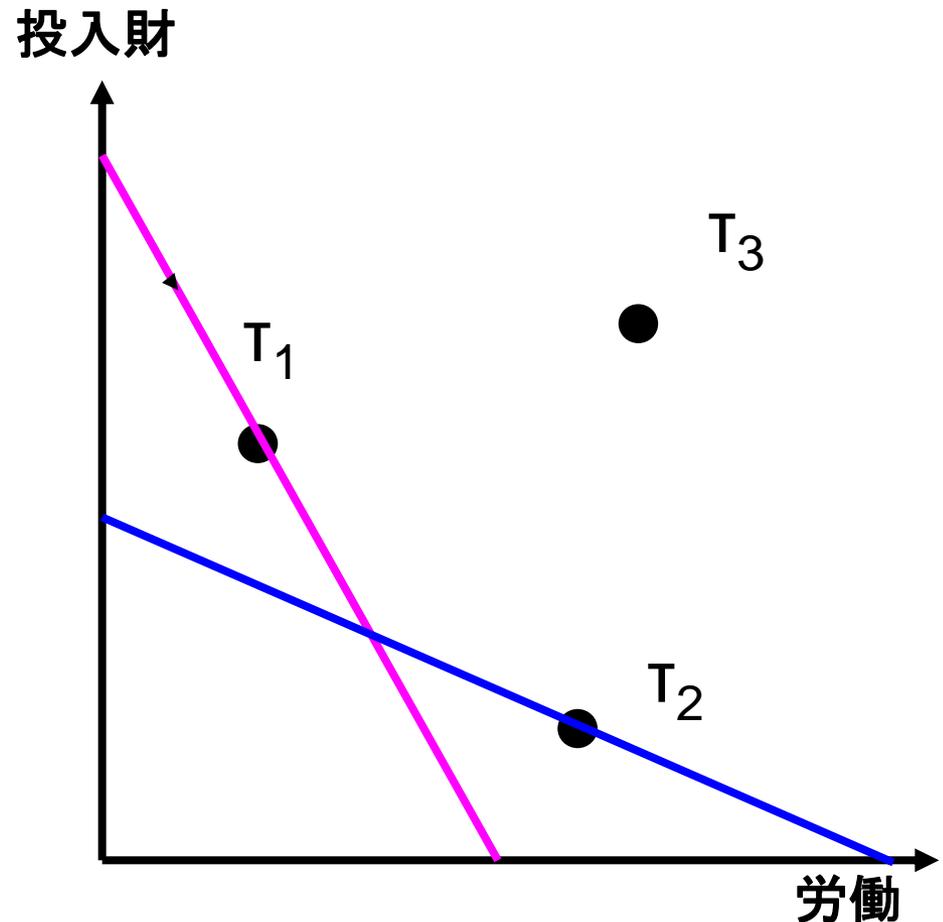
## ● 横川報告:付加価値。だれの視点?

# 横川の構造的価値と歴史的価値

- 構造的価値: 国内 ( $w, p_1, \dots, p_N$ )
  - $(1+m)(w \cdot I + Ap) = p$
  - 技術選択  $\Rightarrow$  横川: 「現在の最善実行の技術」
- 歴史価格
  - 横川: 「ある技術から別の技術への移行」
- 技術選択
  - 塩沢: 技術はつねに多数の財の生産技術の集合
  - 技術選択は、賃金と価格に関係する。

# 技術の比較と選択

- 同一財の生産技術
  - 労働投入のみなら、価格に依存することなく優劣が決まる。
  - 複数の投入があるとき価格に依存する。
- 技術(technique)という用語にも注意。



# 最小価格定理(国内価格)

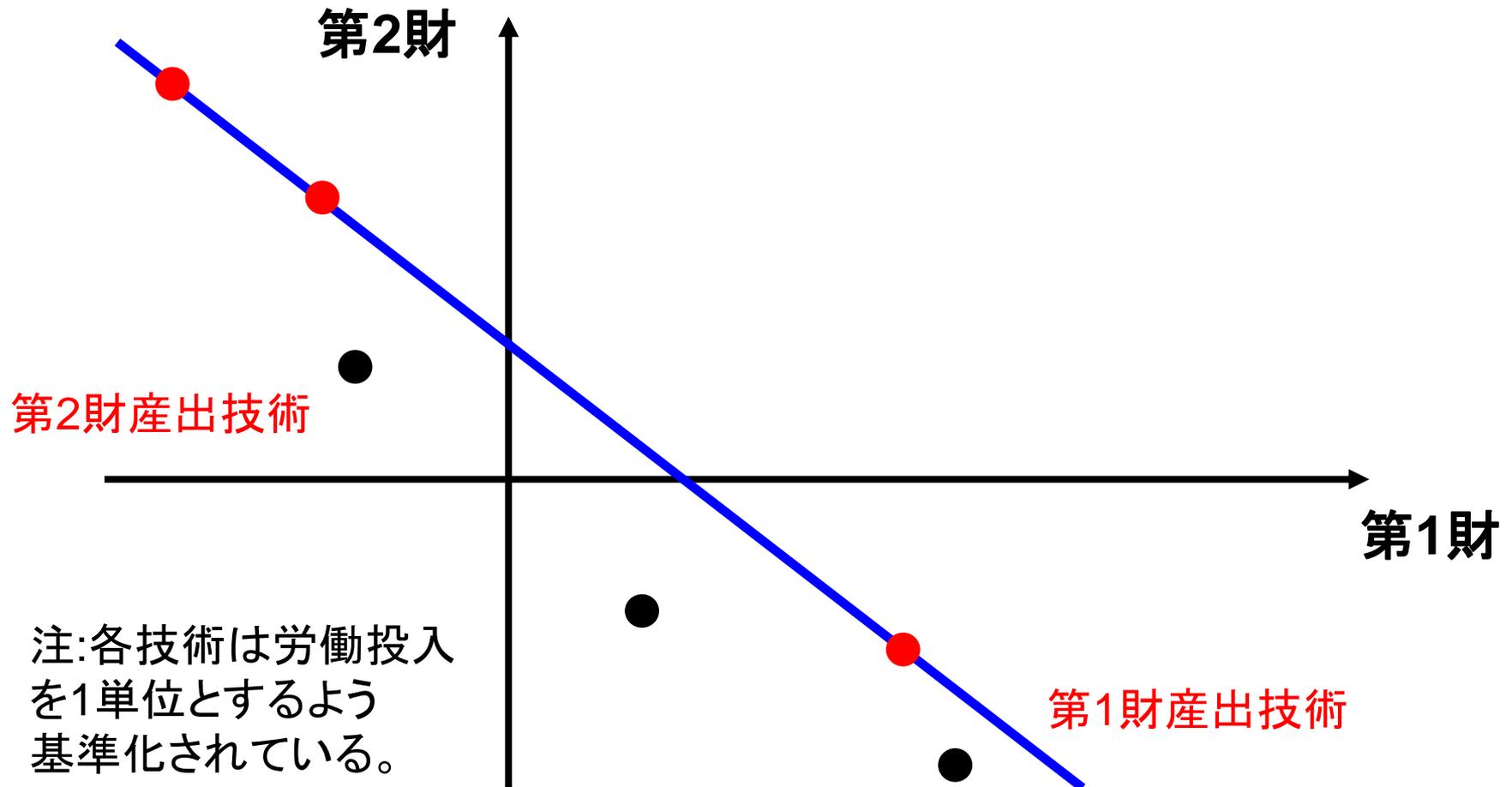
## ● 仮定 (労働1種、財の $N$ 種の場合)

- 単純生産の仮定(耐久財の場合に拡張可能)
- どの生産にも労働は必要。
- 全体として生産的(正ベクトルを純産出)
- 一つの財に複数の生産技術がありうる。

## ● 結論 ある正の $(w, p_1, \dots, p_N)$ が存在して、

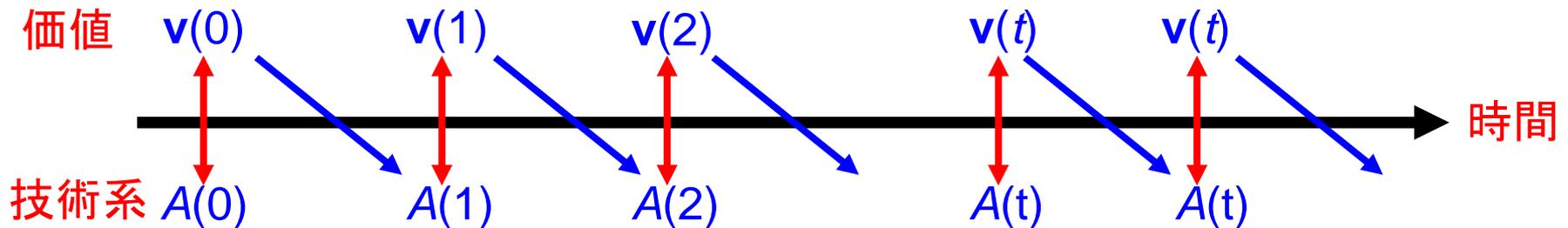
- ① 任意の財に競争的に生産する技術がある。
- ② どの技術についても フルコスト $\geq$ 価格。

# 最小価格定理の図解



# Robinson・Rawthorn流技術選択

- 技術系は一括では変らない。
  - 新規採用されるもの・棄てられるもの
  - 横川図1は、技術選択の実態を表現していない。
  - 更新による価値収束過程も十分考えていない。
- 技術と価値の相互規定的変化



# わたしの考える古典派価値論\*

- 現代理論(異論がありうる、以下は塩沢説)
- 価格理論
  - Sraffa(1960) + オクスフォード経済調査(1952)
  - 市場の競争状態 → 上乗せ率 → 価格と実質賃金
  - 国際価値(賃金率+財・サービスの価格)
- 価格と数量の二重調節過程
  - Sraffaの原理(1926)、企業レベルの**有効需要**
  - 価格変動のメカニズム(数量調節と需要変動)

# 新しい国際価値論の概略\*

## ●モデル特性:

- 多数国
- 多数財
- 中間財貿易
- 技術選択

## ●含意:

- 資本財の自由な貿易(要素貿易理論は不必要)
- 貿易はなぜ起こるか(技術の国ごとの違い)
- 気候・地下資源等は、**地代論**の問題。

## ●拡張:

- 輸送費
- 純粹な中間財
- 特化パターン
- 連結財

# 古典派価値論と需要の理論\*

---

## ● 需要の理論

- いちばん未発達な領域
- 需要飽和(吉川・黒瀬)

## ● 新しい主題: 価格一定での需要変動

- マーケティング理論
- コンビニなどの予測

## ● 利潤理論のためにも

- 製品寿命(設計>生産終結まで)内の総需要

# 産業のダイナミシティ

---

- 与件: ある時期に新技術が叢生する。  
(弘岡正明ほか、ロジスティック曲線は疑問)
- 叢生の中身
  - 新製品(消費財、投入財[新原料、材料、機械])
  - 生産性上昇を助ける技術革新(生産方法の工夫、機械・新材料等の採用)
  - 汎用的技術
- 対応する需要面(横川理論ではここが欠落)

# ダイナミック産業の誕生

## ● 最初期 技術研究、試作・試行、V期

- 失敗率が高いことによる低利潤率はあるかもしれないが
- $p(n^*) = (1+m)\{w \cdot a_0 + \langle \mathbf{a}, \mathbf{p} \rangle\}$   
研究開発・創業・参入は、 $m$ が十分高いと想定されるから
- VALが低いところから出発しなければならない理由はない。

## ● 成功期

- 価格 $p(n^*)$ を確保した上で、需要が急成長
- 他企業の参入がなければ $m$ は高く取れる。
- 内部留保＋借入＋株式発行で、生産容量急成長
- $m > i$ においては、企業単位では高利潤

# ダイナミック産業の成熟

- 普及期 類似品で競合、生産性向上
  - 競争激化⇒ $m$ の低下(一般率以下にはならない)
  - 生産費の低下(生産性向上支援財の普及、経験)
  - 賃金 $w(t)$ は不変、価格 $p(t)$ は多くの商品で低下
  - 実質賃金の上昇、1人当り需要の増大と多様化
- 好循環の形成と停滞
  - 多くの新製品需要成長⇒総需要の成長、好景気
  - しかし、需要飽和⇒人口(労働力)成長率の壁

# 循環・恐慌・転換？

- **景気循環** 雇用が逼迫⇒利潤率低下、恐慌？
- **構造的恐慌** D産業以外の賃金上昇、低生産性？しかし、「生産性格差インフレ」という出口も。
- **転換点** 新D産業に適合する金融構造の形成？
- **利潤率の傾向的低下？**
  - 技術選択の論理←置塩の批判
  - eの上昇(なぜ?)、資本家視点の欠如!
  - 生産価格を認めてもマルクスから離れられない？
  - このどこが動学的比較優位？

# 技術の国際的普及

## ● 特化 リカードの毛織物と葡萄酒

- 毛織物の生産性2倍⇒VALが2倍に？
- 国内競争一定なら、生産性の上昇⇒価格低下

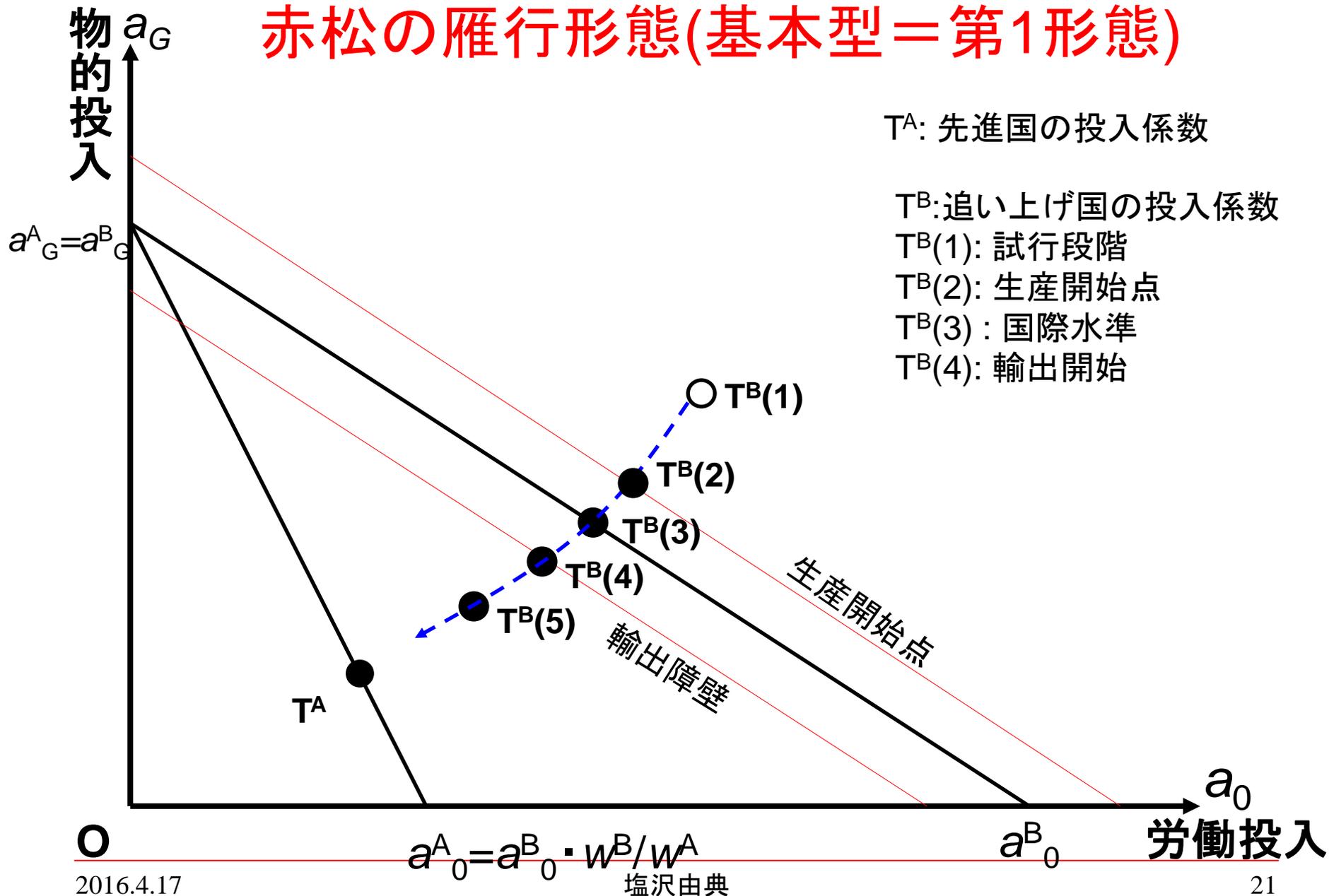
## ● 途上国と先進国

- 先進国と途上国を云々する前に、なぜ先進国と途上国の差異ができたか、説明しなければならない。16世紀まで高々3倍程度しか開いていなかった賃金率が20倍以上開くようになったのはなぜか。
- 動学的比較優位論は、事実の後追いをしているだけ。これでは理論とはいえない。

# 動学的比較優位論による雁行形態？

- ヴァーノンのPC論を東アジアの歴史に載せただけではないか。
  - たとえば、賃金格差はどう影響するのか。
  - いつから生産・輸出可能なるのか。
- 赤松の雁行形態論(第1型)
- 垂直的fragmentation
- GVC
  - これらはすべて新国際価値論の分析範囲。
  - きちんと数量的に条件が設定できる。

# 赤松の雁行形態(基本型＝第1形態)



$T^A$ : 先進国の投入係数

$T^B$ : 追い上げ国の投入係数

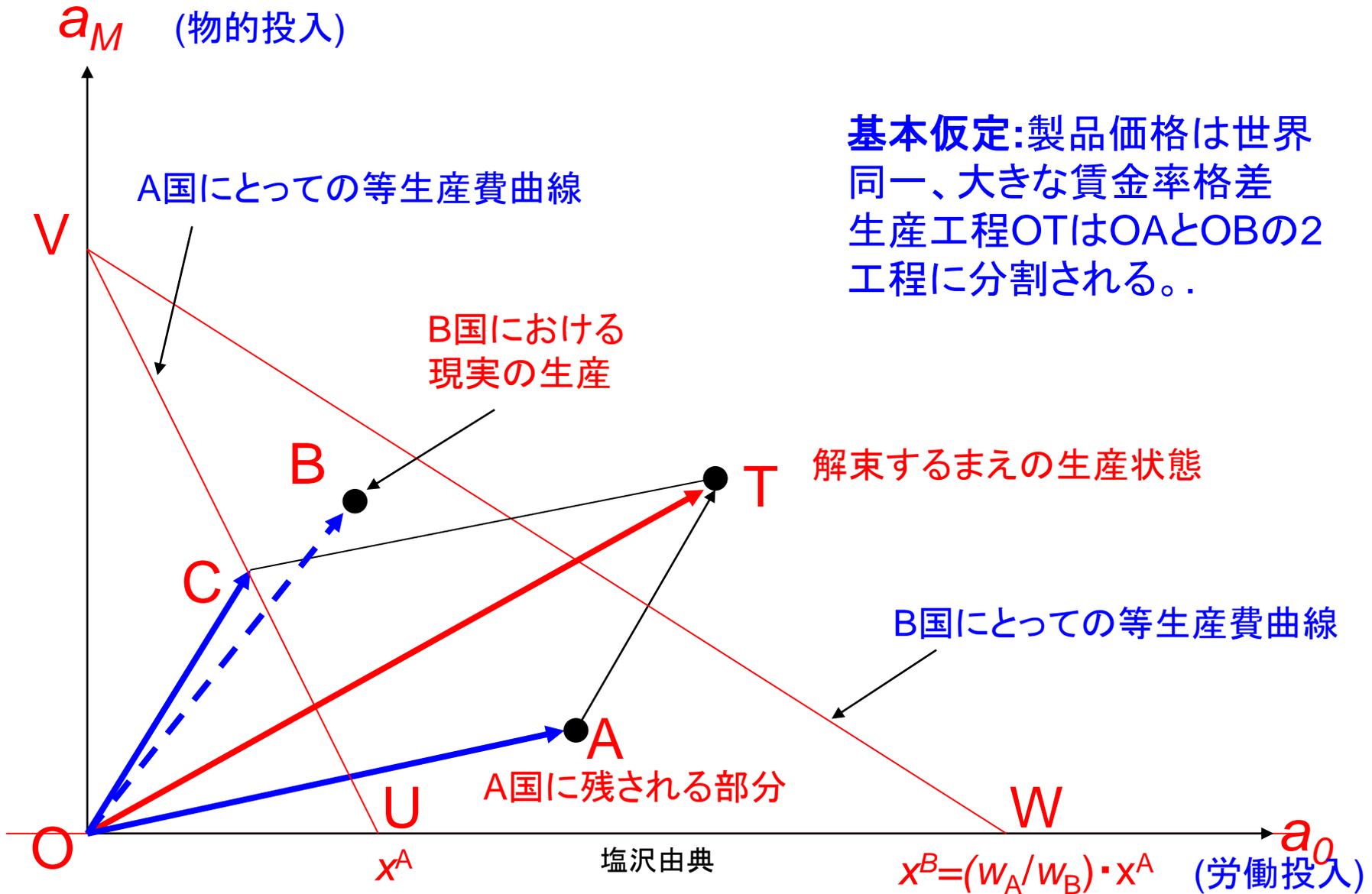
$T^B(1)$ : 試行段階

$T^B(2)$ : 生産開始点

$T^B(3)$ : 国際水準

$T^B(4)$ : 輸出開始

# 工程分割(fragmentation)



# 国際価値論と世界最適調達

- 価値の一義性はいえないが、次のような価値  $v = (w, p)$  がある。
  - どの国も競争的な生産技術(工程)をもつ。
  - どの財もある国で競争的に生産される。
  - 労働力の限界にぶつからないならば、任意の世界最終需要を生産できる。
  - 競争的でない技術では、フルコスト  $\geq$  価格。
- これ以外の国際価値は持続しない。
- ある意味での最小価格定理。
- 古典派価値論の世界が復活する。
  - これにより、価格と数量の(第一次的)分離が正当化される。企業競争が分析可能となる。

# 結論

---

- 横川が「中範囲」の理論を目指すことはまちがっていない。
- 原理論が未開発なため、議論が歴史記述と大差がない(理論の欠如)。
- 新国際価値論は、技術系の変化を分析できる理論である。
- 中範囲の歴史は、短期の経済の累積的変化である。

# 補足的注意

- 古典派価値論は、価値構成説ではない。
  - 原価に製品価格が影響する以上、構成説では価値はきまらない。
  - 古典派価値論は、Sraffa, OERG, 最小価格定理を必要とした。Ricardoでは解けなかった。
- 横川比較優位説は、HOSと同じ結論？
- VALは、資本家視点ではない。
  - なぜその観点が選ばれるのか。
- 横川中間理論:有効需要原理はどこへ？
  - なぜ、8になって需要が出てくるのか。
  - 需要ぬきでの発展・循環・恐慌(不況)分析？



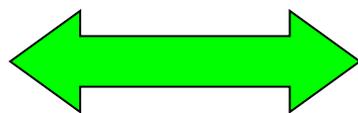
# わたしの考える経済学体系

(7カテゴリーの進化、成長、定向進化、歴史など)

## 進化経済学



## 古典派価値論



## 複雑系経済学

(交換、価格、賃金、数量調節など)

(3限界、習慣・選択、定常性など)

物理的・生物的基盤、技術・知

# すべてを一挙に説明する？

---

- Plotinian Temptationに陥っている。
  - 経済：すべてがすべてに依存する。
  - 正しいとしても、可能か。
  - Walras 対 Marshall
- Gelilean Purificationの必要
  - 部分過程分析を積み重ねること
  - 浅く広くでなく、深い分析・理解が必要
- 研究における分業と協業

# 超大統一問題(理論物理学の話題)

## ●4つの基本的な力

- 電磁気力、弱い力、強い力、重力
- W-S.: 電弱統一理論
- 現在: 大統一理論(電弱+強い力)
- 目指すところ: 重力を含めて統一

## ●個別理論と統一理論

- 個別理論も理論の統一も、ともに追及すべきこと
- Plotinian Templatation: 科学としては必要なこと
- Galean Purification: P.T.に抗する態度

# 理論の妥当範囲

## ● 妥当範囲の明確でない理論

- 科学理論としては不十分
- 電磁気学で重力現象(Black hole、重力波)は説明できない。

## ● フルコスト原理の妥当する商品

- (固定費を除き)費用が比例的⇒原価、単位費用
- 設定した価格で販売する。⇒生産量の調節が容易(低い調整費用、早い調整)
- 農業製品、鉄鋼などはのぞかれる。(市況商品)

# 古典派価値論/概成領域・未完領域

---

## ●5つの理論領域

- ◎国内価値論
- 地代論・枯渇資源論
- ◎国際価値論
- ×労働市場論
- ×金融経済論

## ●今後の努力方向

- 概成領域を発展
- 未完領域の理論化